



北条義翁附合集歌
下

中村俊定文庫

文庫 18

774

2



内川氏
蔵書記



芭蕉公附合集評注下卷

名月のもやう 玉ふ 一 伍 一 何ひ

一 分でもなれた 梨木の 切物

玉味噌の位流ふかゝる 秋北風

玉ふかく 一 何ふといふふ 一分でもなれたと何
しらひちまぐく 何ひあふまをいをつけさ
るあり後の句ろれを將どく 旅神と

玉味噌の位流と枕詞のやうにいひうける
まふち依稽あり附ごるふのる玉なる
乾べり



け宿をまめいて巡る 館の款
すき田をめぐりて 夕立此風
平目なる石を敷く川水場

たどめ此向に町にづいの家と見ゆる附合
なり後の向もさきより田家此やうさと見て
風景は河原などいふものもたかく井戸端
ふく川水ききこるるやまきはまこ
し余ふといへば次皿もゆるし一里
小よつと 款日小むく小横云
お向にぬけ糸まといひく、款足才小もかく

くぬけ出の時ひそく小路用の金たのど益むす
何里よりらぬりあしど糸まといへば人もゆる
さきよりありおちるりくりおちるくあるり
あり後向にさきより小家をもぬけおく旅平
かりたるさまこ

四五人 巡る 僧長采あり
新る町の子ども乃 能智古能

お向春乃日此も采ある小四五人連の美
法沙のうらゆく不をちるんの町と日さく
世物の能もこてたふんの子いももの能乃

稽古さるるにまねつけたる之共ねるこ
とバのまことめばまゝに下小能ふふ
てきさしたる備ありあはらのつけどろ
ふりく歎味きな一春色目前

浦ツボ子の里下してハ泪ぐみ

塗たにおすりおの出し入水

お向ハ浦の親乃もとよ来くまづうへ乃
うたこどもかくり出くわが家のなつ
けふ涙ぐむやうさあり後向塗くおハ
浦のま及具なるべしおの塗やうキハ

徳のやうきなどめあれむうつくしく古風め
たくるまことゆえづうへさる人の及具之
かのおすりいそくのものおしけれもの
かくりまゝはま意味井なれおはふきたま
何となき向のやうあはれどふく心を引ひ
たるつけ合ありふく心をつべし

有明の七ツ起なる茶碗に

ひさご乃れをつけわたり

船く起出くひれおれける老人な
どの風情あらむり

小僧のくきふ口ぶこ(まは
やす〜と矢^{ヤス}海^ノのほるれ^{カキ}あり

やき〜とやき〜いひうけ〜り人のとめる
をもちとハズ子^ガ先^ム小川をかちつ〜りまは
赤^ガ煙^ムのや〜き小僧のけまふつけたるなり
かちふらば口ぶこ〜る小僧あり〜を〜き付
合^カちあり

萱^カ草^カのなま^カかりらぬ^カ恋^カを〜す

秋たつ幞乃 時^{トキ}花^{ハナ}小^コ乃^ノ里^リ

お句^ク恋^{コイ}を^ヲ葉^ハ小^コた^タ〜たるをうけ〜後^{ノチ}句^クを

幞^ハた^タと〜せつある^{セツ}情^{ナリ}をの^ノな^ナ〜り

お^{アサ}不^ホれ^レて^テま^マた^タ萱^{アサ}瓶^{ビン}乃^ノち^チ跡^{アト}
苳^{アサ}井^ヰの花^{ハナ}乃^ノと^ト際^{サカイ}に^ニ笑^{ウツ}ろ^ロめ^メ〜

萱^{アサ}瓶^{ビン}小^コ重^{カサ}毛^モ跡^{アト}ま^マぐ^グま^マ〜と^トい^イふ^フを^ヲ〜と
な^ナ里^リ附^ツ句^クハ^ハその^{ソノ}協^{キョウ}不^フよ^ヨ〜萱^{アサ}小^コ瓶^{ビン}ぐ^グの
花^{ハナ}を^ヲに^ニ不^フい^イき^キ〜り^リか^カ〜つ^ツけ^ケ句^クハ^ハに^ニ不^フい^イ
ひ^ヒて^テさ^サ〜ら^ラふ^フと^トを^ヲつ^ツけ^ケ〜と^トい^イふ^フの^ノも^モな^ナ〜
ぼ^ボつ^ツら^ラあ^アき^キ〜に^ニつ^ツけ^ケ〜る^ルもの^ノは^ハ松^{マツ}つ^ツね^ネふ
何^{ナニ}〜の^ノ形^{カタ}り^リ〜の^ノよ^ヨ〜

から白^{シロ}も^モ病^{ヤメ}人^{ヒト}何^{ナニ}れ^レバ^バか^カさ^サぬ^ヌ〜

冊 二 三

たぐはくやましく 出る 髪ゆひ

たぐはくた附合ありお向病人の何るてんか
ら曰をかりお来るはふあゝわめをいつあはま
なり後向ハ髪ゆひのひろくはくやまて
ゆるやうきあは病人何るを志ゆる
との附合あり、

冬玉の縁ふもの思ひますて

けハへどもよそへども 君かつりこず

お向らの附向お向たらで 誰うつらりたをた
かと思ひの意をよくのべるものこふと金

見初くよりかあよまのどき意とハ志りあがら
羨うつよもわきれぞあぐや、ふ冬玉の白思
ひかけぞもたぐめく 出ほひものひたは縁
よりあはく 思ひがくお思ひのよあうる
あまはきぞもくとよわらうと思ひよくはうく
とけハひよそへども 君ハ志らぬおふつれなきこ
あるあまをうちうらあゝこおねハ志くお意
の向よあありいつらりむべなり意向といへ
たぐはくもく たぐあらだ人意の及くお
ふあらぞすく 意向ハたぐりぬりふく心

をつくぞたると

田ツ風の稲をよほらば月夜て

風ひえろむる。牛の子乃旅

附合たゞろの地ふろく牛の子をまきあ

他國へまきよゆくはまむたのまぐこ

死むハ人の何ふたあべき

仲風や吹起け水くかいえぬ

あふハ二句ともまぢ中て常人のいひ出づき

りよあほらだお向人ハ死るまでころけ水い

つまでも生あバあさましうらむしいあそ

をろこふもちくねもてまハも一人の死るる

おたものあらバ何よりたあべたと滑能をの

べる人ハ四十五たらで死むとそめやそら

たきと兼好もいつり命長きハ死まへとも

いひくともより人の長くはるるのを知るハ

及ん者のあるあり後句又齊好のつけ

合しく係乃翁の人を尋るは松あめた

不よその人死むハ人のといへるお向あらバ

釋教速懐乃たぐひをこそ思ひよるべきを

仲風やとハたきるまむむさく附合も社理

ならむに暇ありぬる人の砂風小吹おとさぬ
かいたるは時かきぬるのしにまじりたる
さけりるも何らだふか恩後なれど
こそ何のわざ

十六音もたのしき名ふしゆりり
あつるをかくさ 物喜みの秋

お向ハ名月の歌も十六音もまじりり
ト名ふよがつりり月を見しとつゆり
後向ハ商人のなつらさふ利成むさびる心を
かくしき喜ももきこゆれどはよハ何らト心

ゆる物喜みの秋のがえをさるるをかくしり
とつねに物喜みとありぬるといふあつるな
らむらりもいままでおごやうならぬおはみ
ちのえらをもよふべしとまじりまれその名
ふふくごものたど喜人と見るべし

物あり 拂ふともの 松明
五月まで小籠のわらもぬきほぐ

けきしりあつる海や
盃たつらふ火燈を巻く
年をひとり日待つとむね

いらなる 附向あらむはうりがく

彼ハかきみの 眞士を 勤りま

空々々々 汝干あぐられ いう 能

お向彼よ 眞士の うつりく かさめ の 氣のう

ごくとつ 白梅 白梅 千見の家 白梅 能をま

ゆ 浦をこの家

城小の 初雪を 吹く 眞ねぎく

たきく 火を 吹 陸つ さが妻

お向の家 白梅 かつりく 眞士を ぬげ 城北の初

雪を 吹く 之後 向ハ 城を のりきく 暁

此を ぐく を くりく いひの ぞくめ

黒木 子さ 登る 谷かげの 小屋

往が 娘と 身を やまうを むお 思ひ

赤ん坊く もいなる む 往妻と ちりて せを

やまうを む 赤ん坊 お 思ひぬる 谷かげの 小屋

徳まき 赤ん坊 黒木 と ちりて 子さ かり

むを くり かりぬ 登き 娘と

水の いハ や 小 佛 さぎみ

ふる ちま ちま 流 流の 涌 流 流 流

るの 何く めれり けき

知算入ふ糸巻もたのが名を替て
衣に古風乃 殊る 粟 解

糸巻が知算入ふたのが名を替るを粟解
のよふりと思さげよもみちのくわくりよぞ

古風の衣ハ何のべき

付もをりくろぐ一 殊 ^{ニッ} の子

け里ふもちつこへたる 布 袴 ^{ハカマ}

ま〜した附合あるを〜さ向もちつこ
へたる布袴むり〜何げ〜を昂が〜ゆる

らむ

^シおふ〜ハ塩屋ま〜く来はおもらひ
おりのちハ〜らぬ 塩屋

け浦ふ名言たをい〜い〜もゆえ何の人
のさふれなるならむとハ見ゆれどたぐいつり
ねド〜世をもて何そびぬるあるが名をよ
べくもゆらだお〜ハ塩屋ま〜くも来ておも
らふを〜と後向〜ハかのを〜これものか
ま〜たきけハ古き〜の〜も〜く〜え〜て〜なる
めれどおより後ハ〜号も〜らだど〜よに
はてこそ志小ものおもらひあらとつけ

御膳
御膳
御膳

いふ御合あらむはこれのれが強御^{ミカ}御^{ミカ}

赤きかゝらをちづるま柳

花さけり^{ミヅカ}舞が舞舞かみよて

赤向のころる八里の子乃赤がらをま柳の

舞るといふ向あれど後向よてい赤さかいらハ

と舞のまぐさふとりありかくつけるものと

んゆ舞う舞あらぶのて花を後合乃

花り
ほつけく餅くふ不どのま柳

あでくこりばは草十乃引たぶ

赤向の家小何んが餅ふもる飯を旅中何んが餅

のまふもるといへる舞のころる飯ふくみく餅ふ

焼つけくくあふどの旅といふころをまけてな

ほ旅のころるゆをいひつけり

やけーたふふいさる舞子

一 抄の蒲團に君がれく舞く

あ向を意のよび出と見て意成つけらるま

れまお乃係の意向なれはきもつるままでよ

た向ありはつ抄乃蒲團の上小そつとれく舞

たるまぐさえもいりだ艶あよへーはつに赤向

附合

の梅子にたゞへたるころそ

たさ乃家と見えたるちまの下

細き井 溝をのびるよみ紙

きこえたるは乃春さき

のころあたらさ伊丹洗白

琉球小燈島 ぶるのまらぐへ

庭千件丹徳白のちまきききえてのころ

たたらさきハ必定さき家と見く産さく

のまらぐへさきさ後をつけり

見しられて近付たけり本為のころ

娘入さきよりたや唱子

本為のころさふ見しらる人位トツライ娘入さきよ

ま唱子引継おなるべしさきさき付合か

くのあきよくお向の位をさきむべし

草赤ま石たれ門がぬへ

ころりよ負さねあふらの坊方

さきよお向の人ごとあさきさき向さき解き

整に及ばさ

干おつきやる 精色の乾

ま拭のまき水くろ水をさきり

附合

十一

前白つねの不ちれど後白れのれが積つみをこえ
らだ干抱つけたるはるれ者よ何らだか積つみをこえ
たどのかれと見えつけたるはては拭きゆふ
をの風名よりまぎれたるをいひつゝのるはま

美若どもみの詠よ連れんちのよべー
御み干せ切きをを鳥のををちれぬ

編ひひを 従し干せ 入いるら 何なゆを

公こうの向むかあれどけのれは縁ゆかりふを
のく、おお然しか乃のかかるる 廿に細こ

妹いの子のががはは恋こひひ 秋あ乃の 風かぜ

くどいれど公こうの恋これ向むかかかぎぎくもめめでたたま
ちとよつとくく奇きなららばらちちののおお然しか
とよお向むかい佳よく恋この向むかを思おもひつらむむきれれ妹い
のの子ことよふふて切きりりかたたひひこり

手てゆりの函は乃の辛からも付つふふりり
月つきももととちちと見みぬぬ鷲じゆ馬ばの市いち

古こ洞どう々々縁ゆかり々々

持もちをを破やぶゆゆぬぬおおおおれれて
糸いとををととちちちち名な取と君きみの志こころららだだや
お向むかたたぐぐ人ひとならぬ人の思おもはるるここのの何なにりりて

おちうらうらりたかぬおると見えてつけくは
 こころあらむらばれは破のぬは物なを
 うちうらうらをささるるあまのまゝとてそ
 中らひ一君ハ志らまやと何るにばてハ何
 が一君のわらまき水ぐみまほまきよまど
 かさうあままえかままでいとうまどいもやまぬ
 なきを旦愧且笑
 流れ牙一たつる 魚水のた
 尸カケゴにさぬ著あらん 陸連のぬ
 ふ降ツクシ水をいむハみゆのりよても何らむうとが

つけるるあめ
 子オトギス規キ瘦シもやふむつらむ
 わがお思ひ浮世一人
 お思ひさるる共ハあ一人うと思へるハあへての
 人の情ありあまのあものこもの思ふこれ
 なくよめり意向ハ身一人情をつくらぬ水
 ば意向ふあらばとあるべし附ぐるるほと
 とぎたの瘦くなくといふを意ふたとへて
 一ため
 けあをいハむとまればドモみく

うたれくかへる中の戸ははら
 意をいおとまればはた
 向なる板やちくち何ぐりたるふの意
 とまふたさうきぬたぐら屋ゆりて
 かつはらうきをうしを附く
 火をたけは谷の洞ももみ
 ふも羊ふ 跡さ 昭 弘
 何れのまへ
 おふのをたるいまのぬも
 入るて何まりのめくはたは奥

お向いらにも古風なるふと見くこの
 つけるならぬ後向のころ八中くふ人里
 ぬくちりふりり何まりよ山の奥を尋ねて
 といふ身ヒコのころあり
 鄂ヒコ算タムの大はる石だくりた
 風ふふくれく 海まの市人
 何るも 長ナガ 短ミダ 利リの地
 五石だくりも入るべき 鄂算を市の
 おと見かつ 風ふ風ふと何ら
 たるこのちの向はたぐ 市人といふよめ

惟
七

十五

安の市を思ひよをたりも安八からんたの
みやとありつづくまほれ都の繁華を
は地人怪怪^{ケイハク}驚き名利のふつもの
ふりーはものえ安の繁華討おれや
見ゆ

殺酒のねたところ目ぐるやれ
いろぐと歩きのふたち出く
おのれも殺酒を業とさるものくらまこと
殺酒たおたころ自ぐるやれいそくと
歩きのふたち出はむべく

ひとせやくさの けん

けりお古きをさる乃名をつく
里もたどつるものむり代へ回れ
をつけるより世おやく何よりなり里おてハ
人おまられたれおりの家ハ頼ゆさのよま
でもせやくとの附ごころや
と旅たうをぬぬ乃何けがの
きぬぐや何まりうがそく何てやうお
みの何んがれもと旅たうをぬつ小を五びて
かふる人と具くきぬぐとつけるき

十八

十八

梅合
十五

かぶそく何てやらあはむハわりたふるべし

風ひきまぬふき年のうつくし

ふもつらむ豆のハ猪もさぐり来ぬ

風ひきてなんもまぬたふるべし

くふろのうりをつけたる一辨之

抽いろくはた 船後なりゆり

月と花はうらの鳥居をわす

あはれもそのふえ

破れ戸の新寺付る春の来

見せハ淋しきあまの 枕より

破れ戸といふを農家のはま

あまふふりたふるを

家あつて服フク袖サふつむ十ハス寸カミ後

まの思ひある 種子のおいひ

きいめくはちある 附ツぐろといふのハち

まどおぼろけろくゆきき白ハ十寸カミ後

家あたハ種子のお思ひある

人さしくいまどハ産の白ひら

幼ユ湫シふフ志シもる 者モノ乃 片 隅

らハ二句とも源氏物語の面影なり

十五

ほろぎん草の何処のえれ中よ
埴種のはげげき海ハこがれく

こまらもかのよ不ひびだまそたけいづら
をつけしりともみえぬがふあくすくつきてえ
もいりだちやー 草の何処のえれ中ハ扱ま
たくふけてほろぎんもあくらむ埴のは
げのきぬも並らむ

あやにくふわづらよ妹が夕あがめ

あのをいたり泪つくむぞ

あやのいへあをぬくよそほろぎんもあくらむ埴のは

け向あがもいへいへあやのえれ中よハあらだ神い
はきまきまをいりそのあやたくのせはたや
けなた人あ思ひゆく及びぬえあのいりあ
まりつて思ひひきもあやあらだやをいへい
かあしと山を見ていながくあをいへい
お思ふ人ハ夕あがめあやのえれ中よハ
泪なつてむといふあをいへい
まきまのうの人だつてあや

月月のうハ乃そもく消さる

石もまきまへ 鞍子居ぬがかり

けつ片句ぬえほく敬味きべー消らしたて
いつる小居ぬぶめとひびくをたるとるたふのめ
をいむとさほふに吐くくつあめあつた
秋の田をからきぬそりのもりて
けつくあがらふみなゆよある。

お向垣懐田地あふのそりえいつれもたな
農家の者どもあれはみなよーらぬまのが
ちあふふたあひくしりくる人ふさつくふ
よあはまえ作状^{ツバ}おとあどのみなあふべ
いう免く〜尾^{ツバ}底の本せ末屋

馬^{ウマ}

ちりさるる子の瘦てかひあふた
本菜屋の子乃病がちあるとつふをりけの病
合ちつり人懐世態をつくさりくつよべー本菜
屋あふ人^{ニム}あふも^{ニム}能^{クニ}も^ノ自^ジ由^ユあふべきをを
くく馳を子の瘦をとりふとつふとるわ下は
ふくめり

花の^{ハナ}流^{リウ}美^ミあめりも^メ流^{リウ}
ゆふーをらつく^{ユフ} 腫^{シウ}き^キに

ゆきくろろあふ附合之流美あめりのはら
やちーといふ人ハまことふ流美あめりはら

馬^{ウマ}

馬^{ウマ}

人小阿らだたど花よつし霞よつし
阿ゆく人をぬばまより任ん阿るぐも阿ら
どけぬが阿ゆくらひて口ハ醒る。ゾー
ハも阿き清きまありとのよお向をりたま
し〜く阿ゆくつたは阿のふね人ななま
はく

何このも無このうちら志づるまめ
里見えゆ〜牛の見えふ〜
人のよ〜向あれが祥きだ
甘芙蓉の花はたたら〜とち教

吸おハ生出うけれ〜さ〜むさ
お向芙蓉の花乃ちる庭ハ多々あよてハ阿
ら〜と吸お乃向とあ〜るを〜けり
せむさハ西園の名産は甘花名あり
片〜木つきたれ月の新枝
昔ながらの花ふ〜るも水鉢
おえあ〜
火〜も〜ふ〜る〜の〜は〜峰のさ
ほと〜ぎ〜み〜な〜啼〜仕〜ぬ〜り

ほ林幽寺趣

隣をかりく車 川らむ
うき人 キ 穀 コク 垣 ガキ よるくらむ

古ものがりけ侍なりかねてともの思ふごと
よを授りましく思ひ車ふちのりひら
りふろのふゆくふちふ車の喜れ思ひりゆ
漢の家一川くく一れくよこあてもろれと
りて出むへたれどとまん思ふは身をれが
をゆべたふあてていぐせむと思ひわづらひて
和穀垣より入れたる之れは垣ハ井の垣とも
柴の垣ともまき垣きをあらたけりかこま

穀垣をくらきとほまう一意のせつあはれと
たりかつらうき人といふゆふのひびき
まことゆく公箱の意向よりりてはけらふ
人意の及ぶべたふよあらまき思ひ一まき
登し

また天ふるぬ月の 影ぼらけ
湖 コ 水 スイ の 秋 乃 比 ら ぬ け せ ぬ

けころれ附合ふあめてはまことふはれ乃
まの面目をまうれたる時あれはけすも
おろしけりおの向もまことまきぬらぬ向ふ

て一句つものくまゝててぬえまゝ天のうらみ
文字あまふちうら河めかゝるつものた御子
をまげく御水の秋とつけるるよ水を句のひ
つりめといふ句えハ御水の秋ハ比えたるおま
時と時をほいとるるげもぬぐくのま
ろよくとれて御上子有ぬの月乃まゝり
ら比えぬのねれふくもらむ画申こ
布子ヌッコ着 習子 風のゆまぬれ
押合く藤てハ又こつ かり 松
布子 恰の松やつらなたとろ風など吹てゆ

ぐれのまゝ—小きき以よゆ人連の詠あるべ
—いまぶゆがれをきば松もつらだ藤てハ起松
てハ藤るゆわ—き神のまゝもま布子足習よ
以の河らひぬといふもるおら—
まむら小蛙まハが体ゆままがれ
藤フジの芽よりけりアム打ウゆりけき
お向を女のまゝ—思こつつけりり打こ
き—く藤乃芽よりみおるるが蛙をたそれて
行打ゆりけ—たよれまゝ—が—きれど
それハ産くろよまろ河れまゝよたて—くべ

付合 下

三十二

たよりまの河もなほどりりれどたりがれよりのこと
能はれの七尾北のぬいほりた
奥の骨志りづるまでの老をこて

されも公おのさるとよ名高た付合ありおの句
もよた句之能はれの七尾乃ぬいほりもほりり
らむさよよふ玉乃果りりり雪も高くお
もふりらむされどお海のそり奥のまきよな
れむかくつけりり意味をかよ何れいりり
まほともけ句のぬをつきりあへばげれば
茶をさけりりれり

まくりり屏風をたをれ女子ども
河原ハ林の實れ子倦りた

河原のかさひふ屏風川まりりたるを女子ども
ものけりつきてりたをりたるさざりり見ゆる
附合あり

僧やいきく寺にかへれり
袿の装と世を種る秋の月

さしはたがひみりたる附合あり僧も寺はゆり
袿も家に向る之句甚高御感慨あり
あり

五六本生木つける

櫻

口代えふもよごれ思ふこのた

あけのけきささめ

でつちがそ何ふ水とがーりり

戸懐子も甚だごとひの素屋を

お向はれ花が向きてたどめ薫こがーりり

しよ向ありしを薫のふもPさべたやと

公羽たづぬるに好むゆふはあらざれもまは

ドたすゆふはあらざといりれけるふよりて薫

を水ひかへたりと云えま束抄に見えりつ

け合ハたどろの相ふなり

まろくくと茶籠を伝る月夜

登をふるひふ起し秋

あれも君直た附向して信ふ西凡依借乃

志的ありお向はとろくと茶籠をつらりお

はようちの何ぞ登をふるひふ起く茶籠

つらな男とうちかゝる内まゝ秋の二字甚

うら見ゆ

ゆがみく草の何りぬ事

るよ、度小志づらく居てはうちやぶり

櫻

三十三

内の道具乃或ハゆグと或ハ蓋の何ハぬも真一
は乃やうまいうも臣途の人と見てるも度ふ
を位つるばあゆい不かこれ度もまびらび
ぬけゆるまゝとこれ凡ねあふべしけ向まね
の急たうき附合あり

はまぐくふふりりりたる恋をしく
浮世の早ハこな小所あま

お向ハまをたぐく一人のちまぐくふま一人
後向特ドて親^{クム}愛^{ツク}の情をれこし小所の早を
いひこちあふ^悦樂^{ラク}極^キりこ^{アイ}情^{ビョウ}多^クお^{ボウ}壯^{ゾウ}

いくばく時ぞ老をいうむといへるあつろく小所が
けぞらならむと何ゆくもとけぞらならねども
あつろく世の中ふいひつくとたねおれさ小所
をぞいひくちのちとんままぐくあつろく
をりふろく

ねあまるとあつろくバ度き板あ

まのひらふ^{ミラ}風^ハ遠^ハまゝる^ミ花の^ハ伝

け向もまゝとて正風のまゝ面目之附ぞろハ
何ぞのあまより款なごのまはひらふ風
遠く何ぞふちまゝと花の陰よりふまて

西のちふ板敷も春風の吹くや
ままぢくも目おのめし名人の句をつらね
ろろりふりささるるべしぞ

夕めしにかまさごとくへば風甚なる

至^レの口交ををかいて氣味よた

前句いつもく夕めしよにかまさごとくふふ
て夕方よりささるるはつらふを
いひたる之後句農家と見てさるは田舎の
子出く夕がれ小降りくかまさごとくふとつけ
ほ之輕の口交といふよて田舎つりもどりのち

一はし

近せしした 殿よりのみ

キ^レと人小降りく夕のやさし

諸^シ侯の侍と見てふのさしり時と終世
よと度くは昔の末はたま之後句たまに
入りの侍と見ていつも金持の大小はたは
と金持と異名をつけられたる侍ふたは
はるる

何をさるるよもさるるなり
花とち存るハ西念が 衣是く

係の観想乃姪之世の中ハ何を足付も
だりり之何もりもまは乃やうなるまをた
ものよといふある乃ふりりて西念といつたは
たうり後句ハきこえくはまへ之

何思ひ子 オホカミ 狼乃 オホウ

夕月秋思の萱根此 ヒゴ 廟 ヒメウ 守る

其とる之

持より田のまやだていざだよま

加 茂の社ハようきやしる之

西 ニシ 衛 ヱ の句之お句をか茂の何より此 ヒメウ

ての附合なり

ぬのやどり乃 ヒメウ 迅 ヒメウ 速 ヒメウ

に望みるま ヒメウ の ヒメウ ためた ヒメウ ち ヒメウ と ヒメウ

お句 ヒメウ きた ヒメウ 迅 ヒメウ 速 ヒメウ の ヒメウ 係 ヒメウ の ヒメウ 観 ヒメウ 想 ヒメウ を ヒメウ

し ヒメウ 世 ヒメウ の ヒメウ 中 ヒメウ を ヒメウ 何 ヒメウ と ヒメウ ち ヒメウ 内 ヒメウ が ヒメウ ち ヒメウ より ヒメウ

望 ヒメウ む ヒメウ 何 ヒメウ と ヒメウ る ヒメウ も ヒメウ ち ヒメウ へ ヒメウ 望 ヒメウ む ヒメウ ち ヒメウ

か ヒメウ る ヒメウ べ ヒメウ ち ヒメウ の ヒメウ 附 ヒメウ づ ヒメウ る

片 ヒメウ 偶 ヒメウ 小 ヒメウ 虫 ヒメウ 齧 ヒメウ か ヒメウ え ヒメウ く ヒメウ 著 ヒメウ の ヒメウ 目 ヒメウ

二階の窓ハた ヒメウ ら ヒメウ ち ヒメウ 。

附 ヒメウ づ ヒメウ ち ヒメウ ち ヒメウ り ヒメウ り ヒメウ 入 ヒメウ り ヒメウ り ヒメウ 窓 ヒメウ の ヒメウ ね ヒメウ ち ヒメウ ち ヒメウ 者 ヒメウ 小

さきより実のゆふうちかきめていそがさき
お病の虫歯をいそいで片隅かごこけは
千いつのるまら二階の窓に皆たちて泣き
やちやうと花白く人情世態は公卿も何ら
て後々志らむ

縮ハツシムの葉ハツシム迄ハツシムのちんらなき風

桑心ハツシム乃ハツシムちのめよ越る秋荒山

お白い何ごともなき白なきを引かこ
何のかとといひ一人の思ふより何めてふらふ
桑心一先在園のがさを物にむとてたど

めく秋荒山を越るはよの雨合之

秋アキ白ハツシムつくは松がまらば

秋アキ重る三葉狗に秋の末

ほそあたる何はゆがさや

入込小流スエ傍カの涌ツキユ河カの夕ユフ暮ユル

中よもせいの高き山ぶ

入込の河の中よひより目たちてせいのは

さげ山ぶ一ちらむはめばま一かりぬへ

細きさざりやういそつめつ

お思ふもよおくへとせつはく

昔の句をへく意にわづらなるまぢりつゆのめ
 て余をうつるならむいぢあれは之後句にさでふ
 花ひぢのつまりと山ともありし一夏をのべ
 くはまぐと物思ひめぐらしくハ余も
 何よりいとていきてとするべくも何んぬな
 ど思ひ志づめはふよ猶もえありてきむ
 はふいうりしてりまのらよあそろの何るべた人
 いらそあうとむりたきむむるはまかあし
 けりぬぞし

秋風の船をこいがは流のさる

厚ゆくくこや 白子 づめ 松

この又後句ハ子歌よむ花のけりけり此一多田
 とつよ句ちのうがれのれこの二とせやとせけきに
 一多田よとてまのうつり 百日にまよりたかや白子
 のあねのちよふもゆきていせの因に案内よの
 りとぼづつぬよけ附句を思ひ出さそぞろ
 友人の恋しうりしがく又け句をよめはかの
 心を思ひ出てあつりたまふらりことを虫
 そえつ句ハさそえたるはゆと

順に死ぬる 及の 何あ

附合

三十九

何よりも 蝶のうつくざゆりある

るびとみぬれのをれ死にふいぢり何
れならむまことまに原も去もはぬべした
蝶の何ぞろもななく其死骸がの上を飛
まづるは夏よ何らでうつくあるがたふ
りれあるとのあろを下ふふくみてたあ
向ふかりだりえをりて附たる向之あ
らを向のえとびとよにはとびをあらざれば

附合ふこと

ふ日をやといはる 俵かこち

蝶 見たきと泣たまひりり

何りのまくなれどうけしを附向之
酒で兀たれ何にまあにらむ

双への目をのぞくまでさるりり

お向叔も屋も飲らして双へよふけりお
田方よても何らむらとての附合之世は何にが
はまの人あゆをうにた附合ありら

中くふとるふ居れば登るな

わが名ハ里乃ぬぢりもの
おのれが方をかきくつり何にふありて

世を歎み弁き執人と見てつけらるる

月夜くふぬわなは月

花影のあまりはねけはら枯て

昔句まことふたよとき句ちぢつころいぢ
いひ出さるめさむらぶらりめさ句か
句よいよやどまぢくはら句よめらされつた
るかひちたのそと寂後句も又一さいよがら何ゆて
花影のあまりはねけはら枯てといへ
れ新趣つゆも昔句ふれららばめでさ付
合しつ志一附ごるるなきこえたのよし

一貫の跡むつり〜と〜

致西 者乃 昔ハ 飲む 分 ぶ

漢の祖因が疾で薬をばらハ中致西をねらり
といへるか〜もらさるふあ〜べ〜か

高趣の人一貫の跡ハむつり〜か

山 伏を斬〜かけ〜

昔句のや〜世のオみぢれがり〜

見〜つけらる〜つ〜く〜句をつくらばかくのめ
く〜く〜までもつ〜う〜べ〜安宅といへる臨の

中ノ山伏を斬たりとつめりありろの侍

もいゝべー

まふおどくおるハれハ何るる

た〜とめて何るる 乃の太日

内さるるえち

芝延 片そ何に 録 さげゆ

ふ びたつ池 鯉 鱒の宿此本後市

新小及づん

相國寺牡丹のそ花乃 生さふて

椀の蓋とは 茶 蘇子 味の子

おみさの牡丹見ふれーなとらびて即のく

後ふむりひら〜椀のふ〜とれハ蘇子味の

子〜〜 斎 蘇子 料理ありとの附合之

むのー 味小 蘇子 泣さる

〜ぬ〜 膏の 踊のハ泊をさて

お白いうたの〜むり〜が〜りを〜してハ 蘇子

を泣さるむたうまぬー〜れ後白ハ 蘇子

哭の何ふれ共どもが膏ハ 踊子うち 蘇子

いろく乃 蘇子ありてたハむれたるま〜に 蘇子

つふれ何ら不の〜ぬ〜も 其〜まが〜て

ゆりーあらむり

まふけの批^{テカ}打^{チム}まめを給ねり

汐内しり、歌 星川の 橋

お向ハ嘘とく者をたちくまふけの批打つ
くゆきし之俯ごるハ其人きで星川の
橋ふけりく松も明えなれたまバ批打け
まふ星川ハ汐内しり給ねりーさうと吹
あるとの時方をあはさたる之

塚^モのわらび乃 養^モる 石原

虚^コ無^モ僧^イの師ふめぐりあふ春のま

ほまこころゆるがやうよまきとえハ内き
なたがやうよまきとゆまゆりくまは解

か

刻^キき初^ハ小^コ漂^シわくりたる^{アキ}花^ハの^ハ花

よあしー細^コ小^コか^カ我^ワ妻^メの^ノ粉

花^ハの^ノ花^ハは^ハ内^ノく^クり^リを^ヲ在^ニ不^レは^ハま^マで
き^キく^クぬ^ヌき^キは^ハお^オひ^ヒ妻^メの^ノ粉^コ乃^ニく^クは^ハま^マが^ガら
く^クさ^サり^リと^トい^イふ^フべ

月^{ツキ}初^ハ小^コ花^ハを^ヲ洗^シふ^フ採^ト出^デー

火^ヒともーく^ク破^ハて^テが^ガふ^フ依^イと^トち

おれもたゞ村居のまがさ

今たや体 靴の織を足連立

春の 襪子 誰もかくおしく

お向ハ侍の子乃差者どもが同ド 草の織を足

つれて 洒^シ 律^リ 章^{シヤウ} 臺^{タイ} などへゆく及と見てむよ

より春の 襪は 見ゆるに 見つけられどと

からあはれまは 附合之是亦人懐世終

日ハ 春く ちよ 二月 靴日

お花小伴の 靴のとれおしく

お向を 伊勢の 海く たるもつてもめでた

お花の 足より 靴とれそむるよや

みどり 赤き 六田の 柳の 枝を

程 茶末 春めく お大豆の 汁

其色の 料理 名^{シヨウ} 揚^{ヨウ} 節^{セツ} くべ

見よ まくはく 萩^{ヒギ} 花^{ハナ} の 着

咲そめて 丑ぶ ちよりの 袴を べり

お向ハ 日枝 横川 など いは 不の 見よ 丑ぶ 男

ちよりの 後向ハ たゞ みるひ びきまて けく 何

とふ だく ちよりの みるも ありや

たえ 茶^{チヤ} みる みる ちよりの 坂

皮^カ群^ムのお者^モきてくらふ音^ネの月
かへりまゝくぬい見つけりや

ちー汐^シの門^{カド}乃^ナ柱^{ハしら}小^こ折^をまゝ

定^{ぢやう}ぬ何^{なに}く水^{みづ}バ^バ碓^{すい}子^こ入^い虹^{にじ}

二^に句^く川^かづの^の家^や之^の汐^しハ^ハ門^{カド}の^の柱^{はしら}ふ^ふち^ちよ^よせ^せぬ
ハ^ハ碓^{すい}み^みう^うつ^つる^るか^かくる^る住^す居^ゑこ^ころ^ろ何^{なに}や^やハ^ハ水^{みづ}

碓^{すい}匠^{じやう}の^のお^お之^のあ^あき^き定^{ぢやう}に^に折^を折^を水^{みづ}て

もの^{もの}く^くふ^ふち^ち此^{こゝ}櫃^びの^のく^くは^はし^した^た

お^お句^くま^まえ^えな^なた^た定^{ぢやう}ハ^ハ左^{ひだり}ふ^ふの^の何^{なに}や^やハ^ハげ^げな^なる^る定^{ぢやう}
と^と見^みて^てお^おく^くふ^ふ何^{なに}く^くり^りハ^ハ櫃^びの^のた^たく^くは^はく^くハ^ハき

住^す居^ゑを^をつ^つけ^けたる^るこ

侍^{さむらい}も^もと^とら^らで^では^はや^やり^り水^{みづ}は^は里^り

る^るの^の音^ね侍^{さむらい}ま^まお^おち^ちの^のと^とか^かぐ^ぐふ

あ^あ水^{みづ}ハ^ハみ^みり^りこの^{この}侍^{さむらい}ま^まど^どの^の君^{きみ}命^{いのち}下^{した}を^をか^かし^しむ^むり

マ^マ侍^{さむらい}ま^まし^しも^もふ^ふ旅^{りょ}小^こね^ねも^もむ^むし^し時^{とき}ろ^ろの^のた^たま

ぢ^ぢ小^こ親^{おや}族^{しゆぞく}ま^まど^どか^か何^{なに}る^る人^{ひと}何^{なに}り^りて^てる^るの^のお^お人^{ひと}

よ^より^りお^おく^くた^たち^ちハ^ハム^ムハ^ハガ^ガり^りま^まハ^ハ其^{その}人^{ひと}を^をお

ぬ^ぬ何^{なに}く^く水^{みづ}と^とか^かり^り出^でて^ても^もお^お思^{おも}ひ^ひな^なの^のお^おる^る

も^もあ^あく^くた^たや^や門^{カド}お^おふ^ふる^るの^のさ^さる^るま^まハ^ハ侍^{さむらい}ま^まど^どの^の

い^いぢ^ぢと^とせ^せり^りた^たつ^つる^る侍^{さむらい}ま^まど^どの^の侍^{さむらい}も^もと^とら^らぐ

侍^{さむらい}下^{した}

三十五

おねあぐわうあとの附合あふべー

るーをれがあ下にぬるーつたのかま

お織ろろえて春のよあま

あまづらがあまふをなやふ出立たるあめ

はれがあまのあまもあぐわいあれゆくあま

首のあまあまあまのあま

あまあまあ下のあまをわーあま

あまあまあ下のあまと見とてかくあつた

あまあまのあまあつたあまあまあま

あまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あまあまあまあまあまあま

あま

あま

の歌乃あゝろも何れやをみなへーハ女よたと
へたるいほくーたもの形ゆと踏おさほよさ
僧乃美若れ心あるべーけて附合ハも重小
をみなへーと時それを何ハせ整るはとつま
なまめくとほふをたさり
月見お坊ー旅のねるニヤウゾリ来
はまづくふ見拾ふとる 布代え
近きりりりの月見をんどりばと旅のねる
ひてりー之は水バ其扱の僕づさひまらま
くの貝拾ひーあたらむ

豆腐白ひくさるちへさうぬ里の花
鳥の巣もめと任阿らまて 二度
お向豆腐さへあき花之悔向るの葉吉
りとなりそ何れたる 度よまむ人清采う
らやむべきの地
はごろろ空を千 身を喜たれたる
ふさくたのむたすりの後摩心
何れたる附向まさう丹どりた二句の眉に
ものかごめもつらなべらなりむり 総波
ふさるーき母阿れ父さハねら水ひと水の母

海合

三三三

此やもひがちちあふ山ちらうらさくおわく
て物々の性もくふたえぐあるよかの井
とかちうらねがえくこもよえたえぶや何
めむをきわくりのをたのみく身を
きむとさるよきんぐふあのか波までハ又母の
れもてふせあれどつひふ室の津ふらうれ
たるちりのれど母のふれころよかりてつ
ゆもえりさるれども思ひきぐきた何れれ
もて母ふたよりきりせやと物ちのたあ
思ひとがはれどけべたたつきもたうてころ

ちあらば日をたふふたましく後魔の子ふた
ふはろくくの共ちりとりふう水けかざり
あくくさまぐくと又かたつてくく後魔
たのてれりたるもこそあはたぐゆるちあ
たたりぶれるりたれどあれよまむ人のねむり
をけまきてのこ

茶よづらうらん人牙ほごこ

田をひきて儂うもなた ヨステゴト 葉つ

まづくら茶を割きく結きものを伝
の僧は志りもろくからば田地ちのど

三十一
三十一

人ゆつくらもみづうらも田原などとりてたの
めは人ふりなりたる附合之

赤群くちやをさるる船網

よるもかどけくひともこのまの

お白うちつどひて療病中を送るさほ之

後向られバ療病も大やり農作もようらぬ

よみて妻もかどけたると

只ろろくと脊中くくはる

赤ぬくり水ぬ人を思ひうぬ

お白只ろろくと脊中くくはる人を病うち

ちあふ人と見て妻のもれ思ひと なる何日

もあつろふ不足なれた身あれともうちぬてはれ

ぬんかやごとあまかて奴思ふならむこの附

合あり

ゆあまがれ輝キ髪カねとく立ゆり

泥うちかり尻まて女のばれ

お白ハゆがれまぎれ輝髪ねとく疾り

ふハ細及と見てまて女のたらしれをつける

あり

はむのハ鳴ふヨ等何ひつ

三十一

博奥ハ花より月のはまぐくに

室のハ噂ふさぐふみちのくとつけて一白ハ
きこえたるまゝなれど月ハひとつ花ハたま
ぐなるをいひかへる新しきこえ

お中ハ後ぞと定小親中し
麻疹しとては 秋のやまはよ

病ハ麻疹たどまゝの子ハねるく人のまゝ
おに定より親中しておやをまゝくとの附合
たせらむらねらうくはうがたまでたたるや
白田の中ハ ちある 稻妻

山井ハ終退のあま夕月秋

あいらハ句の洞子をよくしをたたる附合
畠の中ハ稻妻ハ終退ハ井子退のあま
柏子をいねべー

煙の中ハ おろき 早 桶

けつけ合保の公相は人をぬるきりおろく
とつひびたふ毎ち均賀つけさ白之煙の中ハ
とハちがめよ人を繕てまゝのたふぬうち
子又介の人奴やく早桶をもてまゝる

疾むはしき世の中ぐらふもほしくぎんの本
く望らむ人難垣なごの何ぐりねとみだ
れおたふの何るものえりこむくぞまを
死出のたをたといふの何れバそのころま

はしも

梓弓^{アツギ}矢の羽乃を羽をかききて

乾まるをよめた疾 嘆のま年

梓弓ひくまなごのこまありとれど弓矢と
つぎたるほり何りやなりやよのたなく
とも依借みハ程なたるみえおの白軍垣と

見ろく^{タカ}武^{ヨシ}義^{サダ}貞^{サダ}なるといふ大の軍此おごるた

支那社子指て思^{ヲム}歎^{ゲキ}退^{タイ}治^チの死出たをよめは

ま之曖の一字太よちうら何め心たてく

公立の楷をささるるササれうら枯

梅よ出く幼歌やサ万理ハ花の体

まことえくはまの旅辨之

まごををいこりるまのうつりく

かえり^{カエリ}記^キの^ノ條^{ジョウ}やねまこた

二七^{ニシチ}人^{ニヒト}記^キを^ヲ描^{ヨウ}き^スる^ル

麻^{アサ}の^ノさ^サる^ルた^タえ^エく^ク 及び^{及び}とぬえ

冠教もあまをたぐりぬよ 泣くゆれ

昔白麻の着たえくすゆめハ赤もたなく 淋き
まなるべし ちと秋より後ハつふ句をい
後句よてハゆえ何れくみあさぬまといし
おとあれた人のえみごとて泣くゆれを
つけしめ何のゆえといふハなる水どた
の越をおぶめりしたる

足もとに茶葉種ハおくけの茶

う茶を共大くおしと 幼族の学賢
ふのこを

硯 法度と 衣や せり 靴く

靴の毎定れ字みくたぐはまむ

昔句硯何れハ豊書^{エムシゴ}をどやかくと硯も筆も
ぬきとへし 後句ハはおがた交ふぬくふ
はむかしくもたなく 淋したふ靴のぬれ一ふり
いとせむさべなるれせめくハ定の方
ぬをきしてたゆめともたぬくまむとくおぬふ
人の常情^{コウジヤウ}公狗ひよりのあれを
高き水衣 阿げ^{ハコド}の板^{イタ}
山鳥のわくは 尻ハ志づる

お向のお戸極つらめて喜ぶよ水を新し何げ
はま山さ山まの庭と見て山まおつける
あらし一何となくけたくよお向と

見ぬふりの主人よ恵をまらぬ

さぐと半分かくさ、
金

お向うちくのまれども人志らぬおめお
つを主人の志りながら志らぬがふりて見
さぐたの懐向ハサでよ見つけられく金
さぐとをかくしたるあり

息災な子者下こにあり

老たのハハ屋よりおふかとはり

お向もよめ下くのよをいぞ下くまらび
たるふたぢ人あらばと見て引替して附た
頼保の捨之附ごるハゆを何めて下くの共
人のふ子あぞ引つれてやどとあさかこよま
あせらはよ老人をばゆはれくちの屋の外ま
でめ一のぶさられてみごとバあぞたまりの時下
く乃子ハまこやうなりとねふさられしはま
えひく絆らかくあらむらまことハはまで
向をこしものよあらん

松山の榎、御碕の咲りしめ
倍ホイ乃山灰を下さ 川舟

松山の旗川ふま岸御碕の咲りし中を
倍がれ炭をすて下は舟之春多さまふ
画まふ入倍がの炭とハ画家も及び
ふたは海 扱ツカムく 洗ふ 彼も
魚と小魚のあゝろを 持さバヤ

け附句ハ公お乃名句中しくまふ人ハ贈ツギイ矣
まじらしくも及びぬどあふいりぞ お句ふきは
扱く彼もを洗ふ人ハまことの多し人ハあら

まぢらふ世のりにとくおくひ極のこて月日
をを送はしめし海めあふ人と見てつける
ちゆめつけぞろハまじらしくおきて一句のこしハ
まぢらふ人意の及ぶふよあらむぞ

目のまじりに先子スハしてやめて
きゆるばじりめに 総ツツミれさゆる

目ハ重瞳オモウツナ何は人ハ大粒とあるのカク意ありと
りや人を扱さるふも眼を才とすとぞさんど
お句ハかるむつりしたるを思ひてつ々めた
は句ハあらだた 読ヨミよめは目のうちま

御碕

四十五

ふるがものハ何と云ふらん之後向ハるの人
馬子のめて院もさゆらぐらめ子まゝごりり
いぢましきさぐらごかゝる人あはるこそ目の
たのめ子ふスグーてやあらめいとなく
那智ナチの山乃春まはたて
らりドめさぐらめえつらむむまごども
お向早春のりたよて世の中ハ春よあめ
たれども那智の山ハ雪いと白くいらよ春の
さぐらもあしつふ向をらりドめふ見やめ
はれあしつら付合よや

草カ草サ草サ代ト代ト地雪チ雪サ積シまは 秋のま
伏見フシ何ナニの古コの屋ヤ此ココ月ツキ
そそは突ツ突ツ雪ユキ積シ川カハをゆてゆくふハ伏見何
わの古よ屋此門もまことス又ハさぐらよそのま
よ屋が雪積たたくゆくもまごめいづれは
あらむ月とつふはまぞかあらなる一あは
あがと月とつふ何くの秋とつふまあめ
か月とつふも回どるるまじつとのひたよて
秋も月もまなご
目メせしと推オシもとのあは

詩合
四十一

あつらん海ひ同ドつらなる海基モト

さしつゝみねふらぬら月

お向ハ来る海ひきは商人の年久く御

還カエ来れどもとより基よれぬら出せも

せざれなり。種ある之懐向ハたゞまくのきえ

海ひつゝあふつけりあえなり

新けな味増ふれば海は

ひくとひ出さす代えのり

け向ふつけく人ふきくはるり何りけおふ所

へつゝあふりて又代えつゝあふりくをらむ

と公おたづぬらふ公おのハく代えりなるた

り何らバかよもーかぐくハけ巻の目え

あしつ折れといりけりさむべー何やんべ

公おの依借をさげは海ウミの海流ウミナリを擇エラん

といむりけり合りといれむりよまといりな

といよも依借の重なるりけるをえらげ

ものハたげり合のえらりて依借のを疑に

何らげるりをえらげ公おのこのあを伸のびふ

記をべー附えハ子とえたる命と

ヨモスガフ 者 尼の持函をおさえり

附合 下

四十七

葛^{コム} 弱^{ニヤク} むらり 縁取 名 月

名月ハ人々^{コト} 誼^{コト} のこものこひ^{コト} しく 萩^{コト} をがら月
をながめ 何^{コト} らび^{コト} 一^{コト} ひ^{コト} けり 厄^{コト} の持^{コト} 病^{コト} を押^{コト} え
おて 月^{コト} も見^{コト} げゆ^{コト} 一^{コト} の附^{コト} 合^{コト} をあらむや

ゆ^{コト} 一^{コト} 子^{コト} 母^{コト} かりけ^{コト} 下^{コト} 地^{コト} 家^{コト} 一^{コト} 見^{コト} 体^{コト}
雨^{コト} 露^{コト} を お^{コト} ち^{コト} に 居^{コト} 合^{コト} 一^{コト} ぬ^{コト} 花^{コト}

ゆ^{コト} 一^{コト} 子^{コト} 母^{コト} かりけ^{コト} 下^{コト} 地^{コト} 家^{コト} 一^{コト} 見^{コト} 体^{コト}
一^{コト} に^{コト} け^{コト} の^{コト} も^{コト} ち^{コト} ら^{コト} び^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
ち^{コト} ら^{コト} は^{コト} ち^{コト} ら^{コト} び^{コト} 花^{コト} 一^{コト} 見^{コト} 体^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
は^{コト} べ^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} び^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き

附^{コト} 一^{コト} 合^{コト} 一^{コト} 中^{コト} の^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
居^{コト} 合^{コト} ぬ^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
斎^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
た^{コト} 一^{コト} の^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
を^{コト} 一^{コト}

町^{コト} 一^{コト} 流^{コト} の^{コト} つ^{コト} ら^{コト} め^{コト} と 碎^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き

山^{コト} 一^{コト} づ^{コト} 押^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き

お^{コト} ち^{コト} 凡^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き

は^{コト} 一^{コト} づ^{コト} め^{コト} の^{コト} 白^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き
つ^{コト} ら^{コト} め^{コト} と 碎^{コト} 一^{コト} ち^{コト} ら^{コト} ぬ^{コト} ども^{コト} 一^{コト} 花^{コト} 一^{コト} と^{コト} ち^{コト} き

附合

四十八

の念仏よまゐりたるにつけるる之後の句よ
猶どく薫福をひくくちけふゆくたま

ちれ附合の借籠

くぬ居る海よ 朧カイナわづらふ

江之右左むらひの亭主はぶらぬ

お向座を人のとく 疾がちをひたま

後向うの人に戸よりのがりぬる人を見て

疾何れバ丁海をのまきむらひのま

まぬぐり来てはてはたぬとくけに戸乃

おがしりまの附合あるべし

まぢよもつれどから 白衣代カキ

方くに十敷のゆ乃 陸のま

京の小家住の何りはなあるべし

桐の木高くと 月さゆるく

門めてだまつて海なる歪ふは

庭の桐の木よ月のちゆるまをひり居

と見て門めてまのくら海なるある安

はをつけり

ひらめくしきで まぬがへさる

幼と十は女房の親子 振るゑく

る負者のたほしくと重をひらひてよごれたるを
をぬらへせ居の親子に馳をーちどてまき
わにけりりたほちくまおれも又人懐の附
合ちりりり

まどくけ春もさなぬ人

法不の海流を送る花づりり

たど何といつりもなれた附合なるべし何
やらたづめか たる之お向ハゆ恵何りて人
ーたる人のけ春もほごままだ法不なるべし
せよちりりてゐるとの附合なるべし

どの家も車の方に 定を何ハ

う奥にくひ何く 侯の ガウ 物 スエ

お向ハ浦を道の片がハ町まぐどの家も車の
定を何けな之傍向ハみやとわらめ此人ハ浦
をに滞るーく 雑物も奥をつらなを
ひくちどめいめづらとめでくひちれどやハ
ひ何れたると此附合なるべし

ふんちの 一歌く比きーちり

ま シ 高ハ 早ぬい昇 用

お向ハけたく 優艶あるけーきあるを

後句川橋づく世居のゆかりありてまを
母子の再会此時分をつけり

隣へも走らせど嫁衣連てきて

屏風のかげより見ゆる菓子も登

け二句ふ人懐世態をつくらりとりよべ
位のもれなどの際へも志らざらばつそめと嫁
をつれて来るる之後句ハ家あなどあややす
みて料理あなどあやを儀をふの人の何事
あらむとけしのがけが屏風にまりたごが
に菓子も登の見ゆるふれてハ嫁こめ礼れいにてあし

よとけやくはゆえ公羽匠逸の身みてかきり
ゆぐをみつけれけいからうたごえをべて
依階ハ才一人懐世態しわくらげれがあり水な
ゆをうたごえいひ出なすかき

妹をよいふくらもらりけ

僧歌のちと一先文我や歌

あれも又人懐世態をつくらりまぐ炭俵の依
階ハ世よりたごえをさけしちめ久く縁子
もつらげり一妹は思ひの外よふふらもら
くまごお淡きまらげ先うけけよ任又坊

の借取うくまきぐもとへふかきくろののりを
志とさちるもの附ごるなり

家のちがれく縁を見みり
縁汁わりのものよりよく解りて

ちれも又ぬ乃附合ち里お向ハ大水の何と見て
縁の尻山ちよふ縁汁たきく皆ちちちよはま
ち里るれ中子一巻者れ老人何りてしちい者め
よくしひーといふをーみえいであのげむたふ家
の縁水と縁を見にゆむとつれごちゆくとのつけ
合ちるよー

雪の縁次たぐーたは 縁月

子とむ 丸げく 抱思ひおね

お向は雪の降つてたは涼春風の吹ぬれ
月の縁くとけくは秋はいともの思り
からむといが詩人のさよひくべーやうんをどふ
とむの上み孫もつぐりりなく抱思ふと付
ちるよ

えつち 城ををと一 何がらせ

泣るりれひろふおまー 海ぢふに

ちれも何とさめさなひハちちをことやうま

何れげふ附たは之後とくは位りのひろくも
来し人のあつめたるなるべしゆゑに
まゝまづ人をも告げし之かはかき
くらかきとよ人のあつめしてつち村の会
はさへたつておぼえてとへ何ぞせし飯を
くはせたりとのふ附合もや

今子ムの月ダに雪の何つ片を片し
年子ム者ダ之海ダとほめらぬ小川

秋も色ももはや雪ふ及ハ氷ハ玉ハ在ハの百性
どもがま首もまき雪のほへをも一果

て何そびおよとの附合之を不ハ雪ハハ豊ハま
れとい片あるをもふくたり

堪カム忍ニムあたらぬ七ナ夕タの夜

名月の月ハに何ハいせこたハ芋ハをハけ

何まりものよたふ成堪忍あたらぬほどよた
といは伝浪あり七夕のりおれおたといふ向
ち里附向けおめよてハ芋のちまはくちあつ
むいふも一々名月の月ハに何ハいせこたとのこ

晒サシころあり
のくへききき産さへづ

花見ふと女子たぐりしが 連立く

大和政などのもろくは 晒垣ゆく河之其るこ

りたをまほのさづる 春のけいた女たぐりしが

高けくへもちくく 秘見ふけぐめたゆくまがこ

好抄の餅たやけぬ 秋の丸

刻本乃 安た 玉のまほも

二句の旨にたざりた 世能まこふ解つる

登くらげ餅をたやけぬ くらふてあゝ人をいふ士

の驍者と見てけけぞ 刻本の安た玉もて位

よしとまらめりたるこ

くハ金の干茶 刻むもくハの元

馬に出ぬ 日ハ内づく 意まき

昔向の位をいんさるる 附合のまの女をけ

けんが 飯乃くハ金のけ 茶まきむハおちんの

驍ウツギちのまらこくく して馬くくの意を附る

まのめり

峠小門 阿秋 五十石元

け 嶋の縁ガキ鬼もまをまらる月と花

小園をまの五十五のうけむりたはまきま

て門がまへもたごろうふつくりあり 意算に

後七刀をがらせたれあるべし一内水は後句よ
てハ崎位の内土^{ゴウ}あど見えてはこふけ崎の跡思
言堂までもよきをましく持てねとあつとをり
月と花とつふれあふるはあふれど附ぞるははる
ものふて一句のねもてハ月花の何れもははる
あた思仲も位ならむとて一句のあふると附
ぞるるとあふるとあふると何れもあふると
登し

川越の常一は水を何ぶあふり
平地乃 寺はくまにたぬ垣

前句川越ふれと片海ふ常一まで水の何ぶ
何ぶあふれと後句はたどる中ふ何ぶとよま
塩出さず鴨の 花^{ツト}海とくく

舟用ふ浮世をえ立て 京住居
お向いおあふりゆりた利来ものえまことよめづ
らしと川海どたたるハ舟用ふ浮世をえ
新からた京の住居あふべしよふはまめた
る附合え

中よくて侍穿合の借わらひ
恐古をたしとく 麻さぬ名月

お向とごころのいなるいなるはどたご一はに侍
の長屋住者ぞ見て傍輩合の恐る儀もと
めいなるたるとなるさるさるかめりらひする
あるは向のうの姿をたいて孫のいどは
めくさほえ

狸の鳴子乃 狸をひらぬ。

ちんねらと羊の扱場のけいり

御の狸小鳴子成つけくさる鳥をふさぐ
かはふを能く善の候と見て羊の扱場のけ
くひまげきちまをつけり

きのふうらぬありなる月のり

狗いぬ容かほかきく ねまきく なるは

おえな

孫が孫とは 祖父の借跡

孫指小かへく同 孫 刀

お向を軽き侍の内まき見くつけた。こ孫
泣をつぎきく借跡のかけ付をもけきなる
べーけ向にたご祖父の何と孫がと成り
あれど借跡のつぎきく借跡のきくみなる
ちり後向刀孫指のりなりて侍の子は

御

五十六

やうすなまきりせかつほりけりしやうきく縁のま
のまきりなれたらまきりる附合之

世乃茶に小孫抱ておきしは

何はまきりつちやうと 門のま付

茶白太もたも義垣の家まで小孫のいと袂け
まきり双方より世の茶乃まきりあひて小孫の
まきりぬほりたあまがねも一まきりつちやうを
若のちまきり見てるの小孫乃家に居若のまきり
おが門のまきりぬほり何はまきりつちやうとま付て
はりまきりあまきりあまきりあまきりたはりまきり

登た

やうとすまきり京の道連

有明にたきりぬは乃たきりあひて

まきのがけりたまきをやつてま出まきりまきり

おまきり乃けりた之は三月申のまきり

まきりまきり茶の仲居るまきり

まきりまきり乃まきりまきり

十奉仲居りまきりあまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
おまきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり

五十二

あつがといふ附合あり

根ネの角乃丈てぬ 貫六

淡出—の牛子 徳をはらふるり

ろくろにゆきゆけり—たならむり

むれく木て栗も榎もむくのき

伴 僧た— 萩ふおの 根

城ふをよく見つけたる附合あり 栗も榎も

むく鳥のむけくあつり山さる或ハ大さうと見

てそのさ乃上人は喜おひのりて出はや

りるがぬ—

はぶつこふ星乃 ちんばかきま

引さてむりふをたをやら

茶白員人の粒何よさうこと—てあつるを

はぬ舞の— 萩つけたり何— 左の

出さぬ— 出さぬ— へ 細流せよ

とまぬめらぬ— ぬもさぬりま出べくも何らぬ

なぬが後にむきびて— ひも何— ぬを大ぬい

りゆ— なるで— ぬりわらおふてかくはなむ

待ら何は何れ川きて— 舞にせが— の— まりたふ

わりなくま出るさう— なる何らぬり

附合 十 五七七

形まじめでたう〜の舞まじりも何らぬこと
ゆり名言記み人あひまら水たへたをやらな
ま〜之かの陸臺れ^ギ程^ヨま〜せ秩那の舞
にませ〜は付なり

ふ血仕ま一糸でおぎな結の魚

に皇麻の癖をあら〜かぬりり

依の人情れ附合なり思ひの外ふ多は^ま
ふ〜結の魚も一糸でおぎな男をつね
ハ皇麻な〜て業小ね〜りがちなり〜が
い〜にゆり思ひね〜〜ま^まま^ま小^小程^程せ〜

皇麻もよ〜らぬ〜と思ひてあらを何らた
むるとつ〜ろを車〜ゆ〜り〜ゆ〜ハ
てき〜た〜妙^妙な^な程^程〜

中国ゆりれ 状の者た太

於日の日ハ〜一〜あ〜程^程れ

あ〜いめでたた人の男れと〜た〜ハ大坂何ら
のまもちれ〜ろ〜ぐ〜み^みな^なまり^{まり}〜よ^よあ^あよ
りもか〜ゆりもよた〜りの〜ひ^ひま^まゆ^ゆ〜こ
な^な〜ら^らゆ^ゆ〜い^い〜あ^あ〜代^代〜の^のま^ま家^家子^子ハ
何らでち〜どろゆり候〜と^と於^於日の^{日の}〜ゆ^ゆ〜り^り〜

く出世したる人のりも何きも人よもてな
れんく又もや中玉よりの物もめでたなり
をいふあしたるちりかくとたてに附句の茶
後たがひたれやしなれどまてて附句に茶後
しとく見さるる何ゆあさるたてたて
茶はむどしき茶の流乃 茶 茶
山

山子 門 何る 有ぬ の 月

板根の中子門ぢりり及ぬのハ寺よや何らむ
まよや何らむと月影子ゆへやわたるの附
合あり

水際 みる 敷 濱の 小いわい
見と通は紀三井ハ花此 咲くも

ふええなり

ふち風の又西子あり 小いあり

わが 小い 緑を 大なり ながら

されも名高た奇跡の附合あり茶白さち
風の西子あり 小いあり 茶乃よろづあり ちも
あたけしきなるに乃の上をさうくさる人
ふくわがよの緑をとめてもーや 茶 茶
片小せまど たりとつーむちまを茶登て日知

の定らば風の吹く人のさるも世はあはれ
をとおしりたものさる疾の時季の夜より
くはものさる風は万病の長とへるものさ
とわりのかゝるをふくみくいつはよにあらね
どついでよいひつ

大劫な日は二日ある善の障

い句や涙流ぬへ大劫な日は二日あるといふ
母の余はなるを善の障といふは文字人
を善くはむ父母を志くはの情けを文字

おめらけし入おの障をきくも君が恋
たよみたまへるさるるといふ母のよをきくは
まばたのれが身をもつむちからひ喧嘩に
論をどよめかりよもたち何の娘花子の情か
むべしをげくべし依借をたりしれよとな
思ひろかお向ひひどりのふみものまばた
れさられげらむれれどたまをくらであの情句
をきお人や何のさるく花は意おきか
事体ふどのさるけは皆出家流

善の世並に近きもの化

けまうけハ奥州より住家子京へのがら出家
あらむりか水がえをいふ豊年の子をいひ
たまり

赤野沢新庭の正面

さくらぬねのあらるふ志づ矢
あれも公家の名をたけ付向ふて人のうけりぬ
向ふゆつげごろぬとやいむまゝこやいむ
たしあはにものありし内まづくに思ひみぢれ
は娘のつひふらるるよりまづめたはハ蘭太の産
おふひいりぬくハ庭の赤野沢おむりて

あつらむぢあふろのぬをとむとまほ子口喰に

鳥の籠をつらりとたそき 松の風

大工づらひの奥にきこゆれ

お向ふおのりしたよて学物をもはげめ
内まづく乃小名を籠をつらりとたそきハ
しうらぬ宿と見てあはよハお向より大工つらひ
乃きこゆるゆらちあは内まをつけり

米搗もりまのしとくゆり

からみで市の中をたし合
内き教ころるなりや

月夜の雪もふりぬる雪のうら
 志まふくく跡をわけのなるた
 附ぞろきた日も一日なるふ出く志まふて
 ろくく跡をわける及中のらま
 女鳥トビでエ夫たな一たる思障
 杉スギがよりヨリのノよマたク格カの番
 お向オモをカの意日ヒかたらんだよた日おをめり
 ちとのらばもいつらば思障の女をでエ夫は
 もこしもめ之後向ろの人を格さと見つけ
 たらハ何の公おれ人をぬるを保く格さが一

をこがほしは男よておれをいやさきものこを
 思ひひろ杉スギがよりハ何の格さどこの格さな
 どの可もようの格さとたりり人よぬるは
 まえりてハ女をで日おのエ夫をもさくらら一
 馬ウマをまくく銀ヒね銀月の銀
 尾ビ強でつき一もとの名よなる
 いつたなは附ぞろよキ
 義ヨシくら村ハめけるまえ及
 吹フキ舞舞ぬ舞も男がも口さいく
 石イシは家の一村よて家も古く田畑もち小

金も何れも村中に口きく男之ろれが赤や
藤より村へ出居立居る何れ

心せせを梅みつける 狭いお

殿こはたる。卯月燈の末

笠巻ハ何ならむるがけしき見居る

し

と之がへの分を、舟一航る

射付し、舟おたまは月のくれ

お向ハ船つきのはまきて、回屋をどつふ赤や
滞みしてぬ。高人のちの津乃用るを仕

おしだい、又く舟よ葉こみく、外の津ナ

ゆく人ちれ、は之忌かへの分を舟一航けし

おはべし、後向ハかふるふ、射付し、みおの

おえり、来たる之は、ごめて志ろくぬ入る

みおおあらむ

おの會ま、か、は時れきた

甘至がいの司すの間、も、を、り、侍

く、ら、く、と、ち、る、ま、は、ま、の、を、す、ま、る

か、い、ら、が、の、れ、は、法、教、来、就

おの會れ、ま、ま、は、時、は、いつ、でも、ま、ま、の



たふはべしうふ何げし夏のちきこころらに
んくのちかしくつどいせたるに甚心目のるふ
まぶひつしり侍の居りたるは此れはす
こりは時旅のたもたえづくみなりて此
き死との附合之ふりいけは此もかは時旅は
むたといふ人の會よつらありたる人これ
ぞろの人くふきこぶひて主人をまちぬる
侍のいふあをりてつけくる之どらしくいぬ
附くるを引替どくたぐ武士のた屋を
見こめて甚心目のるも侍のつめぬるふ奥を

の何よりいふてづらしくとさるさる者のありは
そちのまものぞ見こまぬれ其心目のるふお
教侍了人あまぐとけぬてそゆはまに
つけり尾の白たぐづらしくといふより
みおらをつけたる一絆之はれどあれもさ
どの若はいまぐとこのでかうとのまをた
たまあちぬるあろりぐらしくとなるさ
ゆても尾もやあらむと思ふ人結をつけた
たな教たやしく見え遠へる類
産あふハリ行つける善の目

侍

廿五

様 徹きぬき 角力たの帯

二の向何れのまゝたれどをうた附白こ
きく小人の所ひてたりよ志はる人のや
まどかちちたぐひたもやうまてうんも志
けかたたふ産ぬにけけけけけけけけ
とふ志はる人よくたぐひはははははははは
ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ
たはははははははははははははははははは
たよせく帯たどつてらせく何くあるケリカン 俠
の宿めて産ぬくハハハハハハハハハハハハハ

白 供ふ弟ヒタチノスケ 佳スケ 妹も 花とる
いつづとふぬの 飛り

たちやう照るりたふとめありてつたたり
秋の日は乃まどつてつた
まど秋も照きくらでそわのぐらく星もひつ
あつた秋も照きくらでそわのぐらく星もひつ
いとひそやうふやうふふはははははははは
まぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
びていきみゆくつた附合之のちた向たど
こらのやうたまもるどがてお花ハハハハハハハ

附合

六十六

うりおろしてつどはぬ白おも—ろくきた
ゆははまききき

手紙のをもつて人の名をとふ

本儀がゆればたのしくか—とあり

と書を^{ツケ}—と書をつて

たごめの白に附ご—ろく字のま—け—てたの

く本儀ふか—とほ—時その字のた—よある

るを—りてか—り用—りた—手紙のをとこ

せ—心紙^{キヤジ}仕^ジたのどま—るものもち出て何某

更とハづれの君ふま—と名を—つと—つ附

念たりの後の白ハかの本儀乃らの内の—とび

りしてよろろづお大た—たはま—を—て

殊をたび—と—つてたけ—のかつ—のまのや

うに—うらぬ者と見てつけ—り

お風のきむくと吹 秋半過

—と—あると 昔は門まぬ

附ご—ろく—ち白—りお風がむくと吹てお

き—ちま—た秋中—と—子—を—て—海か

—なるべ—き—を—つ—のき—つ—け—ある

ドの家をた—たお—き—ら—ま—あり

馬 一疋ふ 海をを 能ける
小でつちの時うら居るなる人
二の句ほきあるなり 後の句ハ階級之
小でつちの時うられたる男なるは
家などもせせ房をもしたきふらきバ
かごめでもたなく 痛もななくお夜の男なりと
ハ廿二房ふもつ人のことバ形よべ
何の樓うら 軒柱が たつ
二の丸乃光が やぐし重屏風

馬 一疋ふ 海をを 能ける
小でつちの時うら居るなる人
二の句ほきあるなり 後の句ハ階級之
小でつちの時うられたる男なるは
家などもせせ房をもしたきふらきバ
かごめでもたなく 痛もななくお夜の男なりと
ハ廿二房ふもつ人のことバ形よべ
何の樓うら 軒柱が たつ
二の丸乃光が やぐし重屏風

ふもあがつく ほむの 朝日

大木の樓より 軒柱乃たつふハ謀中のはま
見とく二の丸ふハ重屏風まりく光のやぐ
構なるはは館をつけり二の丸三の丸などい
く館のなをわたりつり 諸侯乃屋敷も何
朝のやぐのちを白く穴敷白なるバ丁ねり
つろひて館の掃除など 奇麗なる之は侍
の登壇する朝なるはなるふも何がつてい
はふと重屏風の朝はふろつりて光がやぐ
とゆかく其の向をうらく 附を 後の句

附を 後の句

はまのこゝろは
はまのこゝろは

松風 庭の立廻

軍書おぐりゆのまぐりゆ
ふおえとくかぬてちぎり
わうれを告ふありく
て討死きべりぬあ
きなど涙ながらふもの
ふはまえきでよろの女
乃もとよりお見

て立出はふ境の波を
はるばる青にかき
はるばる青にかき
はるばる青にかき

はまのこゝろは
はまのこゝろは

お白たぐいひのべ
るをけまご後白
をつけは備なめ
からぬ人の恵の
ひてつひふと
なまてまでな
めてもとそ
み病やう

附合

三十一

あつろつゆまうへぬせつなは申之内まぐくふとあ
向ふいひあらべたるをいろくのうきくしとあひ
たるものしとあひ

喧嘩の中をむりけりのけ

仕合と矢檣乃舟をのらなむぶ

附合矢檣のまゆ乃喧嘩と見とほ之を
へばくハ風はげしり船出さへゆとといひ
いや出さしとあひいひつゆて喧嘩ふあひ
たるをりよハあひあひとぬ日と思ひくつひに
舟もものらだ喧嘩の中をむりけりてあひ

が何とみてきけバ矢檣の舟は風波ふ揺ドて
人もけぐりたりなむとくうにちくハあハ仕合
たるものなりとよろくよはま之公船のつけ向
い向くかぎりあは情をふくめり

せめくと位子をい種ふつきすえて

大工屋松屋乃 内敷き

内ハ大工も東屋松屋も東はいろがハ位
子をい種ふつきすえく玉在ふの若徒ち
るべ

一里の船も後のきたる

山ハ皆蜜柑のこ此黄よ成く

け句蓼太が芭蕉句解に才三より、癸句
小何らだといひしを伴賀の桐あが蜜柑の
ここといふ素夜出して附合のうち此句を
るひを何うせしにのちあまたが始て今こつ小出
きよりかけりあまたハ君子なりけり此どよ
句ハもと附合の句あまを吾共句もきくらに
あまのこがこころハ外の句ふも何りあまや
三よもきくられりるるは何れもむねづつを
こも小更き臺の何らそひありりり附合る

山松より山松一里ありてよて舟中より見
やりたはけけたつて後のまききこるるとらふ
小蜜柑とつけるもひだたこ
先ん度の風は人死が何

水くさた子日さの粥喰く
あはれこののやをまぐよつける一柿之ぬに
さうとうのこのまぬるの大風小家もくづれた
びくくした人死ふ子日の葬れのさあまぐ何
とあり

漸に今ハささよふかかせ記

加^カ減^ゲの茶走つりめとのむ

あれも係の人懐世徒なりと室記のなまりに
あろろづらひて^{チカキ}積^キ氣^キをたやめの人と見ら
かかせぬのふれもいづくはくとも居るごりたる
がや〜〜とささ〜ゆりたるあめかほりのこと
乃人ハ年中茶のむけま〜とふえりあり
上を怠つら〜をけそよ墓ま

桶^ケな入^レ敷^キ ち通^チり^リの^ノ派^ハ

町^チぢ^ヂの^ノや^ヤ〜[〜]を見^ミる^ルが^ガめ^メ〜上^ウ下^カの上^ノと^トり
え〜[〜]直^チ正^{セイ}の人^ノ乃^ノ墓^マ茶^チを^ヲけ^ケそ^ソひ^ヒつ^ツる^ル之^シ
後^キ向^{キョウ}も^モろ^ロこ^コら^ラの^ノ場^バふ^フ〜[〜]何^{ナニ}が^ガ〜[〜]居^イる^ル
水^ミ通^{ツウ}り^リの^ノ家^カ〜[〜]桶^ケを^ヲ出^デ〜[〜]る^ルが^ガは^ハこ
て^テ入^ニ入^リは^ハま^マ〜

黒^ク〜[〜]高^{カウ}た^タ樫^シの^ノ木^キ乃^ノ本^{ホン}

月^{ツキ}〜[〜]化^カふ^フち^チひ^ヒは^ハき^キ川^{カハ}を^ヲ出^デッ^ッ入^ニッ^ッ

茶^チ白^{ハク}の^ノ樫^シの^ノ木^キ此^{コノ}茶^チ乃^ノ黒^ク〜[〜]高^{カウ}た^タは^ハま^マ
寺^テり^リ或^シハ^ハち^チあ^アら^ラと^ト見^ミら^ラ〜[〜]大^{ダイ}門^{モン}ハ^ハた^タ〜[〜]あ^ア〜[〜]だ^ダて
小^コつ^ツり^リ人^ニの^ノ出^デ入^ニま^マ〜[〜]月^{ツキ}の^ノ次^ジ花^ハの^ノ体^{タイ}と^トの
附^ツ合^カち^チの^ノ〜[〜]バ^バ〜

附^ツ合^カに^ニ眠^ネ茶^チ付^ツ〜[〜]茶^チ醫^イ者^{シャ}の^ノ供^ク

新茶のかば乃ほつとく東條

殺西者ハ内一をゆめて長むをしめてぬる意

小僕の内しり新茶のぬる三月末の江戸のハ

こなるべしとちのゆも中よた殺者までと

もよろちかさらひ新茶をどゆもてなれよ

ろの白ひれつとまらぬ之

落雪の一層むる降つて

ホハ走むと 次め 田樂

うささの降りたりたる夕方ホハ金た
どかりて走むとたるには次ハ田樂やきて

匠のむちあらむ

手拭脱くおろき牛の糸

川ひとつ渡りてきたるの

お向おたわりの内ま之手拭を頬かがり

とよものして牛をま奪ゆが糸糸おたすて体

手拭をとりてあり後向ひてハ牛奪て川を

わらわら体糸糸かへたるはまゆたつを

ゆめといふておのりたもこや

方く一殺者をいさぐる者の月

踊の他法 誰もお不えん



春の日に産家の伽乃つらめと
かいわぐや 河濱くふらむ

よく世話をしつらつらなる句あり春の日は
くしきた姉妹たちを立ち入り入かりり産家
の伽をいぬるに一度ふもわらふるもあらん
たよりにすめぬるなるべし

いろぐく皆股立をいふ
目つらも何れぞ産陣あり

お白を指傷の出立と見くつける之
通ひたる櫟林に日がくらく

佛の本地をつつむふた

いづれは附ぐらよや
ふるふくと白換出きバわとくきん

ろぐろふまのゆるる 昨縁

郊外の居れ住徒たる内ま之昨縁に茶のハ
ゆる宿ふふくと白換出きむほとくきんも
たふらばべしかくよく不をさめく附句をす
る

羽二重の赤づる色にお思ひ
わらひはくら 沖せりり

昔白く長くお思ひまね人をたへくいつり何
ながち羽二重ふさくろなるれどろ水急べた人乃
はまをいふ之後白にやりり其人ふてお思ひと不
成りけくけ人おた時り計せりまね人
おれがましてお思ひの何る時になふけら計
をたのまむと之計せりぬに計ふおれくく何
るぬも計だのまね人をいふ讀之

智を又ぬきま水一 けはの月

白田ハ何れく 山草 乃 花

町が水あどふ田地ねくもちて智何まご個子

人と見ての附白あり

日え一だむか下を 秋の江

く水づくたのむ 才のり

夕風よ蒲生の家も敷れ行

ゆえ何りて才を日光のゆりりたね一たのみ
下さて之のちれ白なるのわけをいふあてるあて
之蒲生れ家といふを蒲生性の家もたえと
いふゆりりせく夕風よかまのくと志たけ
をつけたる他之白急は度けゆるゆえ何りて
蒲生の家もぬれくるあゆりく水づくも才

のりをたのむといふやれたるころ之夕風子の
玉ふ字何れがごとそ

花の何さうちい壁山をぶらつきて

着るれり、軟 黒谷の陸

前白の花の何さかざりハルハ六嵯崎ハ六東山

と曰く小聖山をかけ何さくはま之後白ハろの

はまをまぐにつける之れハハは黒谷とひ

たうくいひけたりんをつくべ

寒はるにせ朱の下を吹立く

石河ちりハ無縁さの陸

淋しそのがざりをつくしたる附白之太病の

人の舟物をくく茶葉ト水たりりなとおし

も冬の日ちりハいとまきし病人のと何らむが

何らむと葉トあふふ陸の若うれささゆ

るも物をくくまきしや無たな若さよてい何

ゆトまきたなむはまぐく小思ひわづらよはま

呼かへせどもまけぬ 小 袷

糸きた隣の朝葉のそ何よて

糸の向をぬちりたりと見えく陸をふの

むつゆトたふたがひに於葉をのそ何よはま



ありり奥の奥の小徑をまゐりふれり身をよも
ばらばらおぎなまぎく浦ぢうくの里とみち

増廣ふふりつゞきたは音の月

と住子 ちまー 寺のいぢりひ

前句増廣ふりよもく降く降やく煙もた
えたはふまよひハ音ゆりたれて月も懐なたす
ぐく之寺はろれ何くゆりふて住持のなくぬりて後
ハ下司法沙どもがたのが去くにいぢりひゆる所
とたたく家のろれたはたはた
つれに森む一ふまきたまはぐー

附ぐるろ花見よゆきて宿のとまはべきなけ
まばちひれた家に志ひて森く水たたく家
みくたおまでもちろれたとなりはれも
吉ふそのたれた中よたぐ一ふまきたが下て
何くろりさよろの上ふて森むと之ゆりた
旅森ありりり

昨橋のろちりり 雨段む 嵐穴

馬の善いかく ぼもいるぐー

お向昨橋の下まぶくろちかききて嵐穴まの
る之後向馬の善いかくの橋とたぬるべー

本字なけれども句中の春々に見はがめし
といぬもわろし 使女くの吊

梳りゆに來れどおふし 夷 漢

あはれ引ちがへたる傳合之がれに使女の年忌の
とむらひせむとして梳りゆに來居こちらハ夷漢
ふて客の何よはま之係ゆくりくとも夷漢の
家ハたも屋もく使女くの吊き使女ハ借家と
さめるが梳りゆに來るれどおふし夷漢
て梳もかたむけく使女くの年忌もけ方よ
りといぬい何くむらむと心づらひしたるはまふ

とりなすたり

ね何ろびのふけく床る坊主た

る里ろのまき 舟のきぬぐ

お向ふていたで坊主たのね何そびふ出てふけ
てもどりしきぐとちれど後句のそろハ漢乃
北女などを置て何まの何けがれ船出さむと
つふ手ねあけてつうれゆりめいくふ船よ森
はまたあらむらあふねぐさならぬ
ゆりもろハきぬ中ハ生 破去
いあ〜ほど海ふし空なた月ゆるれ

係の人懐世態

摺鉢に植ゑしむづく庵タカ草カサ子

侍子かさね敷宿留の舟

をりした附合なりり舟ひとつ宿留の舟
敷つてきてそのよは侍子をかきぬ曲突ツツのお
ふ摺鉢に植ゑる庵草子の赤きうけく
はも何るべしお白の庵がらしを庭ゆて
つけたぶのりなるべたふ者留舟と傳た
るハぬの又ぬ
考くより一覽まぬり此は花ぶりの

白性やまむ苗代乃侍

花の片うりを考くより一のまぬりまぬ人をま
和何より此百性の苗代おもて侍やまみと
見くは附合や

いひと谷草 粟の川ま貢

七トふなる侍をよりうらぶ助扶持

お白粟のね不た不みく川ま貢ふも粟をね
てまへるなり附ごるはけ國の風俗よてふの
守より助扶持をたまふるなり一はけははは
よめハ扶持玉ふる年くくよらくくぶさまぬり

粟を貢ぎての古風ありふさへ何とぞさすん
まゝとてた〜うらぶよたぬありかへさづ〜もさ
ういをたつがれも〜つゝなればとぞや

三尺通り 意へのち〜くけ
涼〜さハ空田の出 味よく〜え

涼風幽居廻

軽〜は牛乃 赤〜細やさむは
里まほに寺の 買れす〜る入め
いらな〜るりた〜めが〜
其日にもど〜。 詠の〜〜びれ

押 結はゆきをの口をくひうね〜

か〜まどぐ世態ふり〜めたる〜の何や〜は
ま〜とよんち〜ては〜むだ〜お向人お〜れ
〜ふ〜へ飛抜ち〜ゆ〜人の身は〜と〜ふ〜は
何〜ふを口か〜めには〜なる〜べ〜附〜る〜か
だ〜め〜へが〜〜見ゆる世の中ふ〜ら山〜は
め〜る月々な〜といは〜るる〜く〜も〜世の
中〜は〜りのが〜たもの〜か〜た〜め〜を〜に
〜ても〜は〜く〜ひ〜ぬ〜もの〜と〜何〜れ〜た〜。〜
を〜と〜ひ〜よ〜ま〜お〜向〜れ〜つ〜め〜い〜と〜

山

八

尾よ尾をつけく 吐きまふ節
田の中に堰をぬ石の年ふり

あれも世よはく何る附合之をまめを人小ほと
らむとして尾よ尾をつけくいししくおたふひ
のくし人懐ちめ付んるのまらぬおをたびた
こくもちくくの家農と見て年久く持てる田
力中に大きな石の何るがらぬその田はぬ
などいひつてくむくおのくくくくくくく
石ありとかくは片まうくも万性ぐそのおが
りあるべ

世よふたつく 月 能 ちうは

と花の時並父めて度おられけり
けむはたど花の体といふ文字ちうりよてつ
たる之年いと高た人のちうけりたるはめて
ありたるといふ俗強りたど花の時分には
父ハ死れちりといふり
産産産ふ青の結露を引ちら
返はりた子れよぶまはは

お向はたびたし たまを深を産産ふ引ちら
し たるくすのちハ子どもおるくして返まは

子も何れにまゝとてべくもどもいらそがきまの
あふれおふよくひぐくと

まほせ松^子敷のくは松の岩

帳^三の法をいこむ ちお せん

うららの人おあま

手ゆめく身は足軽の追がら

泣く 酒のむ ちよお かあ

無益なまよふを追がらといひあは

大津島の追がら ちよお ちよお 任法省おあ

あゝるは生は是燈のちよお ちよお ちよお ちよお

まことよ追がら 一 燈本おて人よいやめらあ

ちをいちよく身を照し 君お照とちよく後

台も一追めはやりあろの速^{ニウ}燈 一 酒のむは

はとちよれどちよをうく 一 君のちよお ちよお

ちよれて酒ちよく 一 伊ハ年久く 一 ちよお ちよお

ちよくらあまものちよめ ちよお ちよお ちよお

ゆめがちよつとがくして 一 ちよお ちよお ちよお

の追がら 一 一 思ひつはに手ゆめ ちよお ちよお

かほ真^{チウ}加なれた時ちよあひつはよと ちよお ちよお

く ちよもえのまぬちよまふとちよめ ちよお ちよお

公羽のぬき版之

どくろくと撰み風の何はなる

稲 盗人の 恨を 解やは

お白なきとえたはま之たど中のやうまとして
いゆるは何らし一畠盗人をまがりたを
ゆるして解やりたるは不附あり

思見れば款ふふまの出来ん
こぼれく 歳ハとこ一ゆくやら

お白同見ればものくはものくうかたなりか
まひとつのは白何らぬどいつはとろよて月

を見ればはまのるを思ひ出さるものありと後
白ハ何ともお白れとらへ不なたふた月も物と
つけくいはほしたる之は松をよし
仮ふ利る何ははむめハ 殊繕ふて

仕付てはたき 知算方の 白の
田を 穂は 白と 紅の 稲乃 出来

たど 剥きてはたき 二の 白れ 附ぞろ 解しが
一 後の 白ハ 算方 結方 白れ 白と 紅と
りせくはととこ 双方 曲名 家と 白の 白と 紅と

白

白

たはあり

風ひやうりそきれづくのま

明ホウおまにガイ角力のあまいつくかられ

風ひやうりそきれづくのま

藤之内へお殿ごまの南ナ社ダイ大意

夏まねーまふさるこは東風

お殿ごまのそまのねとそは附合を

藤之内まふさるスミのそ急をとあふるといふ

借之附ぐるハ字のねもまでね夏つくさる

もやうさるこは何となくまはまねるのま

たのしく東風るよしく吹まはれしくお殿ごまの

の人乃藤之時ふなふへー夏つくさるハお殿の

町をらむり

おげやとホラおまのねまのねま

夏軍の者ふ引くかつはあめ

お向きこえがたれどあろそにひさるさん

ゆめ老人ふねまの衣を何とあふにたむ

まよひまめよさぎたるがふたは小割けやと

いひたるあふらむあふま世態に何とあふりて後

向軍をいりてつらめたりまふへ軍の向

ハ何くまでもをうくつらばをうひえきりて
 ねくべしひびくたさるる軍のちりやちり
 いへはもけ松之附ごるる大蛇の志を志を
 りめて英後取下さるる之をさるるハ美盛
 が強の直密を宗盛にもらひたる伊も何む
 見えそしと悔へ言入は月の子
 庵の鏡水をささるる好小男盛
 附ごる山里のから水家にあゝるふく住者
 ちなかくへるる一りたる友の二人三人つれ
 だち月見ふ来るとせりたる之何くまで月を

見つゝして今ハと好屋へえりてお蔭のたまあり
 松の陰まぎく小男盛の事好庵ありとらたは
 一た住居ありとべし
 何とくうに綿子とらせむ弱法師
 弱法師をとりりて綿子とらせ及人ハあふ
 人よ何らでんくもつゝ一たがひは醫者は
 ぶつねなやどをたはすあらむとの附合
 ちのるべし

挑灯見ゆる 町の入口

女房よぶ米屋の真主さやぎて
 町の入口まぎく批打又ゆるい踏入る見ゆるの跡に
 米屋の真主乃悔づれしけくたるよぎりしつこそ
 米屋れより主れさやだたれしつこ澄替之
 甘及まいた家の孫ふぬたをせし
 たドなき凡乃石草一来る
 されも名なるた附向之ま向かむりつりくたけ
 き堀を引たなりし軽くしほしたるまことふ
 公ねの手段あらで往り及ぶむつけぐるの家の
 孫ふの取乃ぬくなるをぬたをしたるむハ

六月も寒うらむかほききあさむの次まハ
 何とりましくした向反つくをたふた甘みのけ
 一きのをを何らひてまとい甘なといふ風の
 たドなたりまねのべちほぬとも奇ともたて
 あるにものちし
 江^{コウ}湖^{コウ}披^{コウ}の田舎 陸^{コウ}尺^{コウ}
 とつふめとたふ入月た鳥羽潤子
 片きよさうらなや
 糞くちふ地まうつ暮の意ま
 ぎむびとのびる 男足牙

上子回ト

一度ハ江戸を見たがは小高の

田三 自儘とむぐ 神の山前

お向小商人のやき情ふて世の中思ふまゝ
張のまゝくらねば江戸でもけり一かせぎ
見るとたものと思ふならむり後向もろの
がらいうまもしてまゝせばやし思ひてお向
さるはまこ

お向くわゆるむく名の春

耕^{カウ}他^{カウ}のふをよくりはお向

むく鳥のわはははお向も吹て耕他のも
もらうとの時を附之

尻^シおの^シ縁^シえ^シせ^シも^シお^シや^シづ^シり

ふ乃降日おかたつけふら至

おもしろうさ附合のお向尻おのせもお破る
人ハ人とあるるもせぎお一おるるも暖ひ
ふく一日たお然然としておるるをたのめる
人と見てたお併しおの西まゆり日記たどかき
くくふお目おるふおあどくりくかきつけて
おくはま之れれど日記をかくとせバ附ぐるも

古く一向もつてなりらむをぬの降日たぐりめを
かたつけるといふもく一向新くなる之が
はるをゆく思ふべし

[#] 蘭を刈 阿げく 川ふひろるを

功 亦るで何ちらふちらへ 唯水阿ふ

お向をふのたまと見て 僕をふのむすま
たまをつけり

くろきした之葉の 打カギはるすけ

神よかたくる 前髪 乃 露

さくした葉の附向くくきききき葉の打

と必待ぬへも一たぐひなばねむをといふ一を
ろろしたるに思ひてちぎり一ふふ行くか
くはまで待たれどもつひふ人へ来ぞてやるぬ
たまえかたのくいつられたはなほべし
まききといふ文字甚ちく何れ悔向い
けなき人の女ふはくられたるくく
なごめまちおる李奴つけり

^{ホク} 楷 加むくと有ぬきたお柱
極 極くけくくま又ら

冬の間はききり

ちひはれた顔のまぢりなまは
高もゆるりめと内れおはすめて

むつほぐめでたき内のたまへ高も蟹昌一は
てまぬ中もよくく女房もよた人のちひはき
親ふ今やうならむけひておとなした姿
ならむ

秋来ても白田の土れびぐぬれく
雨云雀の羽乃たええ 扱み 幸

おの白ハ跡暑はたけ きれま之附白いたるの
時ふかり

濡葉敷徒をさうんりけどめ
量の極みずら 碎のちりつきて

けきゝあろを

徒搦な者を 汁ふか入く
店より 翼子 家ハひつとむ

前白ハ徒搦な者を料理ぐるもなくむげ
くけふ汁よか入つとつあろをるを後白ふ
ていさぐれた徒搦なる料理と 玉もちの家
はよがぬて地をふ何のさきかこつけぬ家
家多高の人の家づらりふか ながれ

園のりうらまゝのり人のりのりもののりのり
開のり一のり白のり搦のりくのり佐のりまのり並のり

あれも世態をつくき存附合之お白のりのりあのりのり
そやとのり一のりまのりこのり小のり出のりるのり男のりはのりたのりあのりくのり同のり小のりのり明のりをのり
をのりどのりりのり京のり美のりあのりりのりをのりどのり一のりたのりるのりつのりいのりでのりたのり尋のりねのりてのり来のり
そのりれのりどのりものりおのりりのりふのりるのりものりちのりりのりくのりいのりくのりをのりくのりとのりいのりふのりくのりろのり
ふのりとのりいのりてのり後のり句のりよのりてのりハのりそのりのりまのりとのり一のりたのりるのり男のりハのり園のり
ふのりくのりハのりらのりのりいのりやのり一のりきのり者のりよのりてのりものりなのりりのりれのりどのりものり都のりふのり
てのりハのり白のりまのりあのりくのり搦のりてのり艱カ難ハさのりるのりさのりはのりふのりくのりらのり来のりたのり
はのり人のりとのりはのり一のりおのりりのりふのりるのりものりなのりくのり白のり搦のり志のりまのりハのりハのり又のり主のり

人の供に安んずとの附えあらむ

於のり込のりくのり松のり山のり度のりたのり有のり暇のり乎のり

何のりふのり人のりぢのりとのりふのり奥のりくのりさのりたのりありのり

前句月も明らうに若小松山を於込く面白
きり一た之後句破をのけ一たと見て何小
人もく僕人あるはま

けのり以のりのりとのり下のりれのり急のりのり度のりらのりあのりりのり

腰のりふのり杖のりさのりれのり宿のり乃のり氣のりちのりかのりひのり

前句及申のり一きなるをたどらふ宿とつけ
く宿ちのり一何のりなをたはまたいづも

分ふおちしに 恋をさしう。 恋
草生ふれもしうげく 伏見旅

お白の美さ人の 泣きわきまもなく 恋ふ阿あ。
まがくあるを 引替けて 今ハ思ひたおれぬ 伏見
阿くわれ 倭住おたのめ。人く たる何のえ
たらたえ

吸おで 産家の 空のを たくさる
紀後の お輪を 又すて まら
大坂阿くわれ 此阿家の 片まあるべー
降まど 後阿らしき 水の一志きり

手のひらふい〜 鞆面ユきさる。

まれも名たは 化之阿らしき 水の一志きり
鞆面ユをさし 体といふ ありふて 水のひらふ
といふふく まきさ日をに 照せたる といふく 一白
ハ 軽くーたてゝある 之 依 借 子 軽 之 を ぞ ぞ する
まはれよ さら水あり

何のふおとも 志す水ぬ 大さき
宿く〜 吐のハ 軟 喧嘩 体 体
お向ハたど 志す水ぬ のおハ 志す水ぬ
いふくろあるを 懐向ふ 水 舟の 舟の

七條よりきき見つけふとソノヘー
ハ朝の礼ハスこく 仕止ル至

船の儀の禮乃時分ハづ候

血を思ひつれて續きくる禮の船まむ可
くくハ朝もたれバ時分をづ候くハハ内合
あらむや仕止るめくハハにひぐせたり

是代えぬいづほき屋の陽を

二年辰ふちひはきやづら候させく

幸政の礼ハ先をまどくに由不何れを何れ
く屋ハ志づらく家よ戻り是代えぬいづ

いふ附合

外打の上より白蛇 顔つき

あつた親此 親巴をどつめとれく

琵琶一曲 弾終りて外打の上より白蛇 顔の

目えたるハ佳家女

妹と娘片 める口をさく

家のハ皆 実してさぐる火燈の音

何れの内へ

ねむ待くまふおの日の朝日 秋

木子十をくり 柿衣たむ

朝とい時の登壇をどりつり河の待をぬの掃
の木ちりめおきしるた附合るを何。

首にものを かぶら掃除日

そん咲て茶なつて物。夏の山

掃除日といふより茶を好む居士と見て夏

の山に茶園をつらりたるのめ。たまをつけ

たはて

穴^{キウ}屋^{ウツ}けりて 袴 さらはるめ

獨其のちひらき家小かやだて

お向を繕えをぬ人と見くちひらきお

のよろとびりつたりかめまとは獨其をて

らしく家子居をぶきたるのらあやして

角力にまけくつふりもぬ

山うげハ山ぶー村乃一かは

村の季角力などふたのれそと人まひ不こ

りたるが思ひの外にやめかけて面目をな

らぬとくの山ぶー村の山休ならば一ほ

をかーくらむ

林火内くは来れにゆく庵の花

古かきけがてく春の 花ち

前白ハ山ノ下の庵もしくササとこもたぐハへは
 りどづ、山よ入りて果をとりく事なほまなめ
 後白ハ庵の花といふ春風の吹たかりて去らば
 けがさけしきたぐ春ををりてひたさ
 むらひのかのねころる魚の尾
 一針ハ代をもて来ぬ 価乃粕
 がは白ハ洒落ふるしく却しくつゝなたふ
 は之を白ことふよりらぬ白と
 袖イダキのササ 此 袖もとの先
 皆キ帯キ本ハまうぬふたえてはは之

前白 袖もとの先ハ袖のなく不をよる屋敷の
 まう夏しく、庵よハをササとこして算入ハま
 うぬにたえたる淋しげなはやくまをとりける
 まづらしく、庵に 体むハ代士
 衣豆く 袖さるる心まづ、あめ
 つけぞろい、あらむ
 大ハのあめりうぬるる 挟セ小ユウ袖
 此 類ハ 編ハもさざ
 おの白ハあまりあたふ袖の大ハ車もあつめがぬ
 はちかり 後白ハたぐそは扱ハ下ハはまのいさか

けみ俗ユキミもせぎ世もくらげ海ウミもせぎてり
海ウミくとし

海ウミ約はあり 強ツヨク人の浦ウラの浦

大なるのわくめて 田タよも白田シラタよも
ほえなり

えちのぐらうとくを 店タナの端
海ウミもつよふて 能ノ母ハハの位イ海ウミ

よらのるりてき道ミチきふ一ヒト旅ツリをちどあるに
まゝとくは附合ツケよや
ねらひのわる ねネ子コをまきる僧ソウ

冬フユ枯カのね季キ母ハハをしむ ちお西ニシ返ヘひ
寺テラちどれまがこよや

間マが西ニシ手テバ又マタ見ミたくなは海ウミの松マツ松マツ
ともれしよよる 逢アヒ坂サカ乃ナ松マツ
いりちならむ解トクしけず

あふちかけま ちおの西ニシらぶれ
膝ス 置カを目メ利リのちよ片カタ付ツく

上ウ小コ回ヘし

かけおの布フ代ダイ之ノ敷シに月ツキ片カタして
石イシのやいとふたなりぐんクニなく

百とところのり金小日もろれむうぬたのうけもの
布衣之の顔に月もろしきうぐさをも出たら
むたじやうまきうぐさむくところふをうこの
附合之

かちの舟を先阿がはあり
早徳山ハのさうだ花の咲あひ
阿めのまへ之

美殿のまごれの中乃大らひ
ちふらの小称直も宿小下り
おのりちのどよや

お平や屋の屏風小絵づく お平

面影ふうちか片しゝるるちハ
後向も屏風の画之

霞ふけはバヤ 雲おの役
子どもらり侍る家を阿らそひて

とも子おのれは家の阿るどたらむおのれつ
たらむと阿らそひてたらむおのれ役を
もうちけせるどの 体はまの附ごろま
みくをぞろまハ伯夷叔齊が侍も阿る
おのれ下ゑの鳥帽子をかこむ

幕をまぶれは皆いそをとれ
あまな

垣越ふちよつと 鹽たぎのれりて

雪清のろちい小屋で火を焚火

ほれ鹽をかりくるは雪清のろちいと身
くつける

彼雪のぬく片はそでかくる

青せのさとふもえさつちあとの花

南都春色目前

上下の櫓乃流くる川のちる

一田の中流乃流つく

清水みづのろち田の中も水あふれ流のそ

けしあま

枝一本たえのわきだ

鳥とりはろちも種はぬらされて

おちろちた流るは枝ひとつを及のり

ざしもたのそちたざりゆらやまのそ

ふも海とびれむまことに家ウチ中の情なさ

だ

芭蕉翁附合集評注下巻終



俳諧書目

文栄堂 河内屋嘉七板

大坂心齋橋通北久宝寺町

芭蕉翁附合集評注 篤老編 二冊

芭蕉一世の俳句は解して見やると

古今句鑑 素外選 四冊
同 拾遺 四冊

俳諧十家類題集 五冊

芭蕉を角風名を麦林 言水比法 兼山 奇因 右十人後句類題して数多集む

新十家俳句集 四冊

士朗 月居 交地 芭蕉 完素 成美 針六 兼山 乙二 柳堂 西ふりね子

新五子稿 蕉の中興名人 五人の俳句多々 二冊 集て数巻に

俳諧俳句題兼集 升六選 五冊
半化坊俳句集 二冊

幾句題林十二月抄

小本全一冊

古人の俳句は多々十二月おふけは名ありの 又たしうりうりのまを題のちよわ清のちを 引くくくく巻け俳句の候くくくく

花屋菴校
芭蕉袖艸紙
おの一字のくいのふ事
月次やまのけおとの
変風と記し全三冊

芭蕉翁七書
行移控 三五季七書
句合嘆息と記芭蕉集
小本二冊 更此細志 句合刻

流行七部集
月居完末 五月
當時海の西見
著述約七部集む

四季併題櫻苗
花屋菴家通月
並世及句記
全二冊 一々叙多集む

蕨句三傑集
花屋菴著
二冊
破古事 文と事
たの二家の考む
題くくくくく

蕨句類葉集
五叶 杉木 儂著
全五冊

俳諧季寄圖會
四季雜
全部十五冊

季寄網節
花屋菴校
三ツ切懐中本
全一冊

繪入注解
季寄摺火打
古板と校正して
新図は出
再板二冊 婦人の便と次

季寄網節
三ツ切懐中本
全一冊

增補花火草
立圃著
小本一冊

俳諧詞寄演のきき
全一冊

俳諧宗祇庚
五冊
流行百家句集
針六選 全四冊



